2022年度 北陸大学特別研究助成【　　奨励課題研究　　】 報告書

代表者	所属	国際コミュニケーション学部	職位	准教授	氏名	相原　征代

研究課題名	母子家庭の貧困を予防する結婚への依存度指標「Maridex（マリデックス）」作成

交付額	200,000　　円

研究成果の概要

アンケートを分析した結果、年代に関わらず全体的な傾向として、「恋愛」と「結婚」に対する考え方がかなり違うということわかった。また、30歳代から50歳代は結婚に対して比較的同じようなイメージを持っている一方、20歳代はかなり独自のイメージを持っていることがわかる。（恋愛・結婚20歳代が他の年代と比べて距離がある。）20歳代にとって結婚とは「パートナーを得る」というイメージがあるが、逆に「安心・安定」や「責任」などのイメージが少ない。
既婚女性は、結婚が占める人生の幸福度の割合が高いが、見返りを期待する女性も少なくなく、それなりに離婚可能性も認識している。未婚女性は圧倒的に「結婚したって離婚するかもしれない」派が多い。年代別の差が見られないので、「かなりの自信がないと結婚に踏み切れない」意識がある（から結婚しない）のかもしれない。離婚経験者は全体として結婚への期待度が高く，そのような「期待値の高さ」が「結婚（と離婚）」への一歩を踏み出させているのかもしれない。

※詳細な結果については、北陸大学紀要第55号に発表の論文を参考のこと

研究目的

日本において「相対的貧困率の高さ」が深刻な社会問題であり、ジェンダーギャップ指数120位の日本では女性の貧困もまた問題となっている。他方、子どもの貧困問題も深刻で、子どもの7人に一人が貧困状態にあると言われている。「女性の貧困」と「子どもの貧困」が「重なり合う」のが「母子家庭」であり（ひとり親世帯の貧困率はOECD加盟国35ヵ国中34位）、母子家庭の貧困化が防げないのは、夫婦世帯の経済の安定性を「男性の収入」に依存している場合が大半で、家事労働の責任が重い女性の収入は低くなる傾向にあるため、離婚後の母子家庭はどうしても貧困に陥りやすいからである。この「母子家庭の貧困」を「予測」するための結婚依存度指標「Maridex（マリデックス）」を作成し、この貧困を「予防」しようというのが2022年度科研費申請の研究テーマである。本研究では、その「Maridex（マリデックス）」の予備調査に位置づけ、指標作成の研究会と予備調査を実施し、次年度の科研採択に向けて研究を進めるのが目的である。

研究の方法

本申請の研究においては「Maridex」指標の作成が最終目標であるが、その準備としてアンケート調査を実施した。次の段階として「離婚経験者が対象のインタビュー調査」を予定しているが、その質問項目を作成するための予備調査に当たるものである。
研究手順
①「ジェンダー研究会」によるアンケート調査票作成会議（6月から10月）
②アンケート作成・実施→倫理審査終了後、外部アンケート調査会社へ委託
③アンケート結果の分析（2023年2月から3月）
アンケートは、20歳から59歳までの女性560名に対するウェブ調査を行った。人口統計学的変数（年齢・結婚ステータスなど）に加えて，結婚や恋愛で思いつく単語や結婚の理由、独身に対する評価などについて訊いた。アンケート調査の分析には、潜在クラス分析や探索的因子分析・SEMなどを使用する。自由回答部分については、テキストマイニングも実施した。

研究成果

「恋愛/結婚で思い浮かぶ言葉3つを書いてください」という２つの設問の回答に対してテキストマイニングを行ったところ、「恋愛」で思い浮かぶ言葉として、「楽しい」「家族」と言うのは世代共通だった一方、「恋愛」と「結婚」、および「結婚」と「幸せ」が結びつくのは20-30歳代であり、40-50歳代は「結婚」と「忍耐」の結びつきが強まった。「結婚」と「子ども」の結びつきは強く、特に30-40歳代ではその傾向が顕著であった。全体的な傾向として、「恋愛」と「結婚」に対する考え方がかなり違うということが読み取れる。

また対応分析を行ったところ、縦軸が年代（上の方が若い）、横軸が恋愛（左）と結婚（右）と解釈可能な結果が得られた。30歳代から50歳代は比較的同じようなイメージを持っている一方、20歳代はかなり独自のイメージを持っていることがわかる。（恋愛・結婚20歳代が他の年代と比べて距離がある。）20歳代にとって結婚とは「パートナーを得る」というイメージがあるが、逆に「安心・安定」や「責任」などのイメージが少ない。年代のせいなのか、意識が変わりつつあるのかは今後の分析が必要である。

①結婚の利点（見返り）要求度【質問：雨の日には疲れていても駅まで迎えに来てほしい】，②女性の人生における結婚の重要性【質問：自分の人生の幸福の半分以上は得られる】，③結婚生活が終焉する可能性の有無【質問：離婚することもありえる】，を問う3項目を「はい・いいえ」の2択で訊いた。結婚に対する態度を総合的に検討するために，まずK-means法による非階層クラスタ分析を行った。解釈可能性から4クラスタ解を採用した。そして結婚ステータスとの関係を検討するためにカイ二乗検定を行った結果，有意であり（$\chi2(df=6, N=526)=40.482, p<.01$），残差分析の結果，結婚群はCL1【結婚が私の幸せ】が有意に多くCL3【結婚したって離婚するし】が少ない，未婚群はCL3が多い，離婚歴群はCL2【結婚には何も期待しない】が有意に少ないことが見いだされた。また，結婚と子どもの有無による4群との関連を検討した結果も有意であり（$\chi2(df=9, N=300)=18.405, p<.05,$），残差分析の結果，離婚・子なし群でCL3が有意に多くCL1で少ないことが見いだされた。また，年代との関係は有意ではなかった（$\chi2(df=9, N=526)=5.280, p=.809$）。

【4つのクラスタ】

CL1：結婚が私の幸せ／CL2：結婚には何も期待しない／CL3：結婚したって離婚するし／CL4：結婚の見返りを期待する

①の質問は特に「即時的対応」が求められる、かなり親しい友人でもた頼みづらいことを尋ね、結婚相手への見返り要求の高低を探った。また、特徴的な四つのクラスタにそれぞれ名前をつけた（上記参照）。既婚女性は、結婚が占める人生の幸福度の割合が高い（CL1）が、見返りを期待する女性（CL4）も少なくない。それなりに離婚可能性も認識している。未婚女性は圧倒的に「結婚したって離婚するし（CL3）」派が多い。年代別の差が見られないので、「かなりの自信がないと結婚に踏み切れない」意識がある（から結婚しない）のかもしれない。子どものいない離婚経験者は未婚者と同じような傾向を持つが、離婚経験者は全体として結婚への期待度が高く（CL2が有意に少ない），そのような「期待値の高さ」が「結婚（と離婚）」への一歩を踏み出させているのかもしれない。

※詳細な結果については、北陸大学紀要第55号に発表の論文を参考のこと

主な発表論文等

学会発表予定

相原征代「日本における恋愛と結婚の「際」とは？女性を対象とした結婚に関するアンケート結果から」日本国際文化学会第22回全国大会（2023年7月8-9日）

相原征代・後藤和史・ハーモン・デニス「「結婚」は女性に幸福をもたらすのか (1)
―「結婚の見返り」と「結婚の幸福度」「離婚可能性」に関する人口統計学的変数を用いた分析―」日本パーソナリティ心理学会第32回大会、2023年9月9-10日。

後藤和史・相原征代・ハーモン・デニス「「結婚」は女性に幸福をもたらすのか (2)
―決定木分析を用いた複合要因の探索的検討―」日本パーソナリティ心理学会第32回大会、2023年9月9-10日。